

高等学校42%と低い。これは、親子での話し合いが少ないためではないかと思われる。

また、「まだ明確でない」では、中・高校生が小学生と差がないのは、教師として配慮しなければならぬ。

図7

【教師】 子どもの志望する上級学校や就職について、資料をもとに一緒に考えているか。

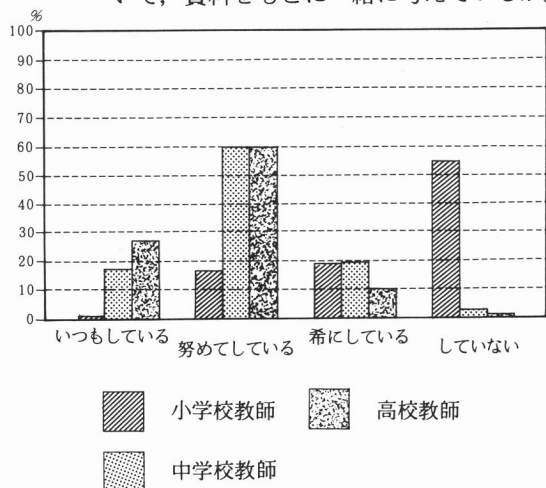


図8

【教師】 教科指導や特別活動の時間に、今後の過ごし方と将来の生き方との関連について気づかせ、自立を促しているか。

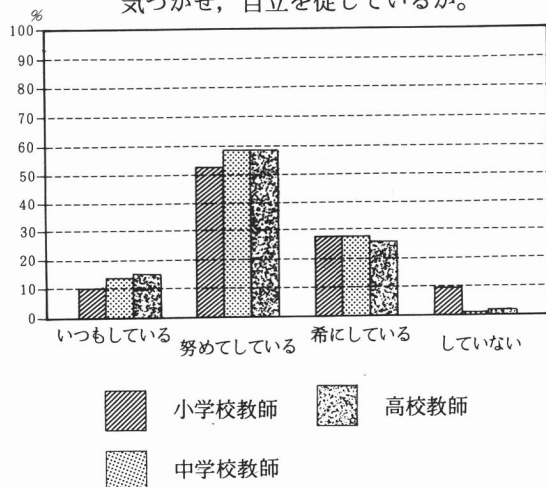


図7から、中・高等学校では、「いつもしている」「努めてしている」を合わせると77%~88%と高いが、小学校では「していない」が55%と高くなっている。

これは、小学校では特に、資料をもとに具体的な指導をしていないと考えられるが、小・中・高等学校と継続し、一貫した指導が必要であろう。

しかし、図8の将来の生き方についての指導になると、小学校から高等学校まで大差なく、発達段階に合った指導援助がなされていることが読みとれる。

《指導援助の方向》

○ 児童生徒の能力、特性を理解し、温かい人間関係を築き、それを基盤に「目標に向かっての努力」につながるような励ましをしたり、認めたりするかかわりを通して、自己実現（進路指導等）に向けて努力するよう指導援助する。

○ 教師や保護者が、児童生徒の鏡となるような生き方（やさしさ、たくましさ、決断力、勇気、考え方等）を示したり、感銘を受けた人の生き方を話したりして、生きることの尊さをわからせ、将来の夢や目標設定に役立てられるようにする。

○ 自分自身の向上のために、いろいろな苦しみや困難を乗り越えるには、努力は欠かせないこと、小さなことでも継続することの大切さを分からせる。

○ 誰にでも失敗はあり、その失敗を生かし、より良く生きようとしていることを、自分の体験等を通して理解させ、時には、手段や方法等を修正しながら、新たな目標に向かって努力するよう指導援助する。

○ 中・高等学校においては、特に、進路に関する調査・検査を実施し、個別指導に役立て、生徒の学習や生活の目標の一助となるよう配慮する。